

葛城古道レジメ

3月24日にご参加になる方にはお読みいただき、関心を広げて
いただければ有り難いです。

金剛山葛城山の東麓に神武天皇を初代とする葛城王朝が存在したという大きな歴史があることは、この山域を愛して登る私達の誇りだ。

1945年の敗戦でマッカーサーが日本の国を支配するようになったとき、神国日本の思想の根源になっていた古事記を国民に教えないようにして日本人と神話を切り離した。

竹田恒泰氏はその著「現代語古事記」(学研パブリッシング)の中で、20世紀を代表する歴史学者アーノルド・トインビーの「十二、三才くらいまでに民族の神話を学ばなかった民族は、例外なく滅んでいる」を取り上げ、これが民族存立の要件であることを示唆するものであるとし、皇室廃止、政府解体、神社仏閣の焼き払いなどで日本人の反発を買うよりも、日本人が戦争を起ささないように骨抜きにするためには古事記を封印して日本人と日本神話を引き裂く。これでいずれ日本人は日本人の精神を失い骨抜きになることを意図したものだとして述べている。

戦前戦中は古事記等の記事を日本の歴史として教えられていたから、終戦の時、確か国民学校4年生だったが日本の歴史はコロッと変わった。

神武天皇のことは学校の先生は口に出さなくなり神武天皇に取って代わって卑弥呼、邪馬台国が、歴史の教科書に現れた。

「文献は、書かれた時代の思想を反映しているので史料としての価値に限界がある。掘り出した遺物、遺構から歴史を割り出す。それが科学というものだ」という考え方が戦後主流になり今日に至っている。

民俗学、歴史学者である大阪教育大学名誉教授鳥越憲三郎氏(1914~2007)はその著「神々と天皇の間」(1987年・朝日新聞社)の中で、日本書記や古事記など伝承に基づいて作られた文献に光を当て、敗戦によって否定された葛城王朝はホントのところは実在したと論証された。

私が神話に戦後初めて接したのは、1984年に、岳洋社の「ワンデルングガイド①金剛山」の執筆中のこと。葛木神社の当時の宮司葛城 貢ミツグ氏に、葛城家は天神立命アミコタチミコ又の名を八咫鳥命ヤタガラスミコから続いてきた家系であって、私で132代目だとお聞きしてこの本に書いた。

敗戦後の歴史教育で育った私には、何とかのミコが出てくるようなこのお話はお伽話だと思えた。が、そんなことを説かれる宮司さんがおられること自体が金剛山の特殊性の一つだと考えて記事にした。戦前の国民学校を思い出させる宮司のお話をお聞きして神話の世界に軽い関心を抱いていたが、「神々と天皇の間」に

出会って目が覚めた。本当の歴史であってお伽話ではないのだ。

炉端山友会の皆さんとは 2016 年 3 月 21 日に今日のコースを歩いた。金剛山剛友会では平成 17 年以降毎年葛城古道を例会で歩いている。「葛城王朝の話、しつこいな」と思われる方は多いと思う。しかし「マッカーサーの命により」が日本を支配して 73 年経ったが、怖いもので、教育者が次の教育者を育てるから世の中は変わらない。その中であって、伝承に光を当てて金剛葛城の歴史を解明しようとする鳥越憲三郎の世界を今年ももう一度覗いていただきたい。

(1) 葛城王朝とは

神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝霊、孝元、開化の9代

開化の第二子は、慣行によれば葛城王朝を引き継ぐところだが、クーデターで葛城王朝を倒して三輪山麓で大和朝廷を立ち上げ崇神天皇 10 となった(第一子が祭事、第二子が皇位を継承するルールは仲哀天皇 14 まで続いた)。

(2) 存在の時期

弥生後期から前期古墳にわたるものであったと思われる。

神武 即位の地、御所市の本馬付近で弥生後期(100～300 年)の遺物が出ているところから、三世紀中頃に王都が設定された(「神々と天皇の間」P217)。

孝元、開化は前期古墳(3 世紀中頃～4 世紀後半又は 3 世紀後半～4 世紀)。

(3) 実在の論拠

A 葛城王朝 9 代の都と陵墓は全て北東～南西か北西～南東の線で結ばれる。皇位継承も後々のルールと同じ

B 名神大社(ミウジンタイシャ 927 年に作られた延喜式で最高の社格)の分布後に昇格したものを除くと名神大社は大和に 9 社あるが金剛葛城の東麓に 5 社、崇神が立ち上げた大和朝廷の三輪山麓に 4 社が集中していて、この二か所が政治文化の中心であったことを証明している。

C 奈良県磯城郡田原本町にある弥志理都比古ミツヒコ神社の祭神は弥志理都比古神ではなく、神武即位後の第一子神八井耳命カムヤイミノミコトである。

名神大社の官位獲得のために弥志理都比古神を下ろして神八井耳命を始祖として祀ることを多氏一族の頭領太安万侶が考え、実行して成功した(第一子には妻子がいないはずなのでその子孫ということは考えられない)。

古事記日本書紀の編纂をしたと言われるくらい歴史に通じていた学者だけに、太安万侶が葛城王朝を正統なものと認めていたことは王朝実在の証左になる。

こう言うと「うっそう！太安万侶はその編纂に関係ない。」声を上げる方もいるかも

知れない。

以下余談のようで余談でない。鳥越憲三郎著「古事記は偽書か」(朝日新聞社第一刷 1971 年)によると一般的には 712 年に太安万侶が古事記を編纂したとされている。

ところが 796 年にできた続日本紀に古事記の名が出ていない。勅撰の史書は 106 年後の 901 年までに 5 冊発行されているが、同じ勅撰の史書でありながら古事記の名は出てこない。また「新撰姓氏録」(815 年)にも古事記の名が出ていないから早くても 815 年以降の書物(P286)。

初めて古事記を世に紹介した「弘仁私記」はその序文の中で嵯峨天皇を淳和天皇に譲位(823 年)後の名前「冷然聖王」と記しているので天長年間 823～833 年の間に作られ、従って古事記は 712 年でなく 815 年から 833 年の作られたことになる(P288)。「うっそう！」おっしやる通りである。

弘仁私記は、太安万侶の直系の子孫多人長が 812 年に朝廷で行われた日本書記の講筵会で講義の内容を筆録したものであるが、ここで初めて太安万侶が元明天皇の勅命で 721 年に古事記を編纂したこと、日本書記の編纂にも関わったことを紹介した。

弘仁私記の記事が 1270 年になって勅撰の史書としては初めて「釈日本紀」に紹介され、それまで無視されていた古事記は日の目を見たわけで、江戸時代に入って新井白石、本居宣長が宣伝したものだから歴史書としての権威を確立した。太安万侶が**従四位下**に叙位され、**多氏一族の長**となったことなど、**その実在は続日本紀の 716 年の条で証明**されているから、日本書記古事記編纂の編纂者に充てられ登場できるだけの大した歴史家であったことは確かである。

D 神武即位の地

日本書記巻第三に神武の言葉として「畝傍山の東南(西南の誤記)の檀原の地トコロは国の真ん中のような。ここに都を作ろう」と言われたと出ていて畝傍山の西南には御所市柏原がある。柏原は奈良時代の「東大寺奴婢帳」や続日本紀 797 年にも出ている。

1772 年の「菅笠日記」に本居宣長は畝傍山に来て檀原という名は残っていないかと尋ねたら、その村は一里ほど西南の方にある。この近くにはない、と教えられたと書いている。現実にそこに御所市柏原がある。(「神々と天皇」P18)

同じ日本書記巻第三に「神武が豊作祈願の言挙げの中に蜻蛉アキツ(トンボ)が出ているので秋津州アキツマの名がある」と出ていて、今も即位の地に秋津の地名が残っている。

(4) 欠史八代 神武の次の綏靖から開化までの八代の天皇の系譜はあるが事績が日本書記古事記に出ていないから、伝承は嘘だ→載ってます。

日本書記巻第四には神武に続く八代の陵墓、都やお妃の出自を明記している。その位置や出自から特に孝霊7、孝元8、開化9で勢力範囲を大きく広げ、大和北部、河内、山城、丹波に、また古事記によると吉備国まで政治的制圧を果たしていったことが分る(「神々と天皇の間」P50～62 P268～270)。

(5) 日本の始まりは邪馬台国の卑弥呼ではないの?→とんでもない。

八幡和郎著「本当は謎がない古代史」(ソフトバンククリエイティブ)をお読みいただきたいが、「魏書」(280～290年)の中の「東夷伝倭人条トウイデンワジンノジョウ」は「魏志倭人伝」と俗称されている。

この本には239年のこと、邪馬台国の女王卑弥呼が反対勢力狗奴国から守ってほしいと、手紙を持たせて魏に使いを送ってきたと書いてある。

卑弥呼の国邪馬台国へは対馬、壱岐、唐津、糸島から福岡市の西部、博多、不弥国(フミクおそらく北九州市のどこか)、ここまでは細かく書いているのにこの先はごく大雑把に、ここから南に水行二十日で投馬国。邪馬台国へはさらに水行十日と陸行一ヶ月と書いてあるが、そのまま行けば南西諸島になってしまう。大和に着くはずはない(P115)。東潮著「邪馬台国の考古学」角川学術出版初版でも「南に水行二十日で投馬国、さらに南に邪馬台国、女王之所都に至るには水行十日陸行一月」と解説している(P31&174)。

日本に文字がまだ伝わっていないこの時期に高度な外交文書を中国語で書く能力が邪馬台国に備わっていたとは考えられない(「本当は・・・」P116)。

敵と戦うために、大和から魏に助けを求めるわけではない。

卑弥呼の墓は「径百歩」の円墳であり、奴婢百余人が殉葬されたと書いていて箸墓古墳を卑弥呼の墓とするがそのような記述は日本書記にはなく、また箸墓古墳は日本全国11位、280mの立派な前方後円墳である(P124)。

魏志倭人伝は邪馬台国については、北九州だけ取材して魏国に報告したものを文献化したもので、卑弥呼は北九州の小さな地方政権の女酋長で、日本を代表するような存在ではない。

紀元との関係 神武天皇が127才?信じられない。しかし・・・

天皇が亡くなられた年齢は日本書記巻第五に崇神10が120才、巻第六に垂仁11が140才。不自然な数字が出ている。そんな日本書記は信じられない。そう言う前に次のことに思いを致してみよう。

日本書記巻第三に「辛酉カトリ年春正月庚辰カエツ朔ツイタチ、天皇即帝位於橿原宮」。辛酉とはどんな年か。

推古 33 はその 12 年に中国の陰陽五行説を取り入れて初めて暦を制定した。五行説によると、60 年の 21 回り目、1260 年目に大革命が起こる。

冠位十二階、十七条の憲法制定、小野妹子遣隋使として隋派遣二度といった顕著な事業を重ねた推古 9 年 601 年こそその年として 1260 年遡った年 660 年を神武即位の年とした。そのために不自然な年数が目立つことになった。

(6) 日本神話の雛形は金剛山麓にある

尾張族が住む金剛葛城の東麓は高尾張邑(タカオハリムラ)と呼ばれていた。この邑には帰順をしない土蜘蛛がいて、これを殺すのに葛のつるで網を作り、覆い被せて捕らえて殺したのでその地を葛城と命名した(日本書記卷第三神武天皇)。

神武の数代前から葛城族が北九州を出て和歌山市へ来て(熊野からではなく)紀ノ川を遡り、五條から高天彦神社(標高 450m)、橋本院(標高 410m)にかけて広がる金剛山の東麓高天原タカマガハラの台地に移住してきて畑作や狩猟で生活していた(「神々と天皇の間 P250~251」)。

東の低地、鴨都波神社(標高 98m)付近、葛城川に柳田川が合流する辺りでは**鴨族の分派**が神社の祭神**事代主神**を祀って稲作で豊かな生活をしていた。金剛山の東麓でも南の方の風の森辺りで稲作をしていた鴨族の分派である。

葛城族は鴨族の分派と何度も交渉して一緒に稲作を営むことになり、結局は鴨族を支配するようになり、2km 東で本馬山の南麓、御所市柏原で葛城王朝を立ち上げ初代天皇として即位した。

葛城族と鴨族の分派の間で実際にあったこの歴史的事実を神々の名で物語ったのが神話であり、他の部族が支配する土地に乗り込んでいってその部族を支配下に置くことが降臨であるから、天孫降臨神話、国譲りの神話であって、神話では次のようになっている。

天の神様高皇産霊神タカミスビノカミが次々下界の神様大己貴神(オオナムチ=大国主命)に使者を送って国譲りを迫る。最後に二柱の神様、大きな十握劔ツカノツルギを抜いて地上に逆さまに突き立てその切っ先の上にあぐらをかいて坐り、国を譲るのかどうなると迫る。

大己貴神は「(息子事代主神は今海へ釣りに行っているの)使いを送り、當問我子、然後將報(我が子に尋ねてからお答えします)と答え、息子が承諾したことで国譲りは成功した(日本書記卷第二神代下の本文)。その息子というのが**鴨族の分派**が祀る**事代主神**であり、人と人との話に戻せば**鴨族の分派**である。ここに落ちがある。

(7) 高天彦神社の高皇産霊神は天孫降臨の指揮者。天照大神でない高皇産霊神を瓊瓊杵尊の外祖父としたのは**後の加筆**。神武即位の計画を立て実行したのは神武天皇を五代遡る高皇産霊神であって高天彦神社のご祭神である。高皇産霊神は次々使者を繰り出すなど天孫降臨の一切の世話や命令をした。そこに天照大神の名はない。活躍の内容は「日本書記卷第二 神代下」本文に詳説されている。「瓊瓊杵尊が天照大神の実の孫」と明記した冒頭の 41 文字が**後の加筆**であることは一目瞭然である(「神々と天皇の間」P237~8)。

日本書記卷第三神武天皇の本文にも天照大神を無理に引き出しているところが二か所ある。必勝祈願を天照大神でなく高皇産霊神にお願いしているところまで読めば簡単にわかる。(「神々と天皇の間」P236)

初めて天照大神を国の守護神としたのは葛城王朝をクーデターで倒して大和朝廷を立ち上げた崇神天皇 10 であり(日本書記卷第五)、次の垂仁天皇 11 も天照大神としたが(日本書記卷第六)まだ制度化はされていなかった。

天武天皇 40 は天照大神の子孫が国を治めるという日子思想を取り入れ、伊勢神宮に大来オオク皇女を齊王イツキノミとして捧げて正式に制度として確立した。

これが斎宮の初代であると扶桑略記(平安時代)に記されている。

高皇産霊神はここで天照大神に書き換えられた。高天彦神社のご祭神こそ天皇家の始祖である。(「神々と天皇の間」P187、P201、P237)

(8) 葛城の名称 地名と人名

神武天皇東征の最終段階で金剛葛城の東麓高尾張邑タカオハリノムラ・タカオハリムラは尾張族の支配下にありこの土蜘蛛(抵抗勢力)は帰順しなかった。神武の皇軍は葛ガツラのつるで網をつくり、これを覆い被せて捕らえて殺した。よってこの邑を葛城という。「皇軍結葛網 而掩襲殺之 因改號其邑曰葛城」

(日本書記卷第三) 神武の命名である。

地名 葛城はのちにこの山系の名称となり、葛城修験道の発展とともにさらに南に延び「南は友が島から(中略)北は亀の瀬といへる所にをわる惣じて紀泉河和の四カ国に跨りて行程二十八里が間の惣名なり」(葛嶺雜記 1850 年)となった。

人名 平定もほぼ完了ということで神武は神武天皇として橿原の宮(御所市柏原)に即位され翌年功労者 7 人に論功行賞をした(「神々と天皇の間」P198)。

その中で高尾張邑の劔根命ツルギネミコを葛城国造ケニヤツコに任じた。

新撰姓氏録(815 年)神別の項を開くと劔根命を祖として大和国では葛木忌寸、河内国では葛木 直、和泉国では荒田 直が劔根命の後であることが分かる。(「新撰姓氏録」「神々と天皇の間」P197)

金剛山頂葛城家も劔根命の後裔である。（「葛城家系譜略」による）

新撰姓氏録に皇別の項もある。

葛城王朝 9 代の 8 代目は孝元天皇。系譜を見るとその曾孫が武内宿禰、その子葛城襲津彦 となっている。

今回のコースで檜原休憩所辺りは葛城襲津彦の本拠地であり、一言主神社には襲津彦の名を入れた万葉集の歌が出ている。

葛城襲津彦の葛城は、葛城王朝をクーデターで倒した大和朝廷が、葛城襲津彦とその父武内宿禰の功労が顕著であったため、襲津彦とその後裔に葛城姓を名乗ることを許した結果の名である。劔根命とその後裔の神別の葛城とは別系統のものであり、新撰姓氏録では天皇の後裔として皇別に分類している。

2019 年 2 月 18 日 根来春樹